

# 慈光寺本『承久記』の合戦叙述

——後人加筆説にふれて——

松 林 靖 明

一

「沙石集」巻九の「芳心アル人ノ事」の条に尾張国の武士山田次郎重忠の話が載っている。その話というのは、重忠の所領のうちに住む山寺法師が罪を犯し、その科料として重忠は以前からほしいと思っていた法師所持の躑躅つづはを譲り受けることまで済ませようとした。また命ぜられて取立てに向つた家来の藤兵衛尉某も、本来なら役得として貰えるはずの科料の半分に相当する絹布を与えようとする重忠の申し出を固辞し、躑躅の枝を取つたという、主従ともに優雅な武士であつたとするものである。この説話の書き出しに、

尾州ニ山田二郎源ノ重忠ト云シハ、承久ノ時、君ノ御方ニテ打レシ人ナリ。弓箭ノ道、人ニユルサレ、心モタケク、器量モ人ニ勝レタリケル者也。心ヤサシクシテ、民ノ煩ヲ思ヒ知り、万ツ優ナル人ナリケリ。

と、その人物が紹介されている。「沙石集」の作者無住が止住した尾張国木賀崎靈鷲山長母寺は、この山田重忠が母の菩提のために建立した寺であるから、無住が山田重忠をよく知り、かつ好意を抱いていたであろうことは容易に想像される。その「沙石集」の説話が伝える山田重忠像は「心ヤサシクシテ」「万ツ優ナル人」としての側面であるが、「承久ノ時、君ノ御方ニテ打レシ人」であり、「弓箭ノ道、人ニユルサレ、心モタケク、器量モ人ニ勝レタリケル者」であつたという武士的側面を最も

よく伝えるのは、「承久記」等の軍記作品であろう。

本稿はこの山田重忠の慈光寺本「承久記」中の描かれ方を探り、合戦叙述の構造とそこから派生する一・二の問題を考えてみようとするものである。

## 二

「承久記」諸本中の最古態本である慈光寺本は、山田重忠の名をどういふ訳か「重定（貞）」と誤っている。その山田重忠が最初に登場するのは、北条義時討伐を決意した後鳥羽院が承久三年四月二十八日、城南寺の仏事と称して武士達を召集した事件、慈光寺本上巻の記事の中である。

去テ融催ケル趣ハ、来四月廿八日、城南寺ニシテ御仏事アルベシ。守護ノ為ニ甲冑ヲ着シテ、参ラルベシトゾ催ケル。

（中略）廻文ニ入輩、能登守秀康・石見前司・若狭前司・伊勢前司・安房守・下野守（中略）尾張国ニハ山田小次郎・三河国ニハ駿川入道・右馬助真平・滋左衛門尉。（以下略）

と、この記事の中に出る「山田小次郎」が重忠であろう。別の箇所で「我ヲバ誰トカ御覽ズル。尾張国住人山田小次郎重貞

ゾ」と名乗っているからである。上巻で山田重忠の名が見えるのは、この「廻文」の一箇所だけである。彼が活躍するのは、下巻の合戦場面である。そこで次に合戦場面の展開を表にして示しておくことにする。

### 〈合戦叙述の展開表〉

① 後鳥羽院の命により能登守秀康軍勢の手分けをする。

(一) 東海道：河内判官秀澄・三浦胤義ら七千騎

(二) 東山道：蜂屋入道父子ら五千騎

(三) 北陸道：伊勢前司・石見前司ら七千騎

(四) 宇治・瀬田・高陽院：残りの人々

② 東海道の大將軍河内判官秀澄、美濃に到着し、軍勢の手分けをする。

(A) 阿井渡（河合カ）：蜂屋入道

(B) 大井戸：駿河判官・関左衛門・佐野御曹司

(C) 亮間瀬：神土殿

(D) 板橋：荻野次郎左衛門・伊豆御曹司

(E) 火御子：打見・御料・寺本殿

(F) 伊義渡：関田・懸棧・上田殿

(G) 大豆戸：能登守（秀康）・平判官（胤義）

(H) 食坂（旗カ）：安芸宗左衛門・下条殿・加藤判官

(I)上瀬：滋原左衛門・翔左衛門

(J)洲俣：山田殿

③鎌倉の軍勢、遠江国橋本に到着。京方玄蕃太郎、ここを通  
過しようとして企て、打田党に討たれる。

④山田重忠、鎌倉方遠江井助の尾張国府到着を聞き進撃を提  
言するが、秀澄に斥けられ偵察を出し、敵の斥候二人を生  
捕る。

⑤鎌倉勢、尾張に到着。軍勢の手分けをする（ただし、説文  
あるか）。

⑥鎌倉方の武田・小笠原、尾張川で活躍。

(b)大井戸：小笠原の郎等荒三郎瀬踏みして、味方の勢を渡  
す。駿河大夫判官落ちる。

(a)河合……蜂屋入道、二宮と組み負傷、自害する。子息蜂  
屋三郎、武田六郎と組み討死する。

⑦尾張川を固める京方勢、所々で敗退する。

(c)鶴沼瀬……神土殿降参し、北条泰時に斬首される。

(d)板橋……荻野次郎左衛門・伊豆ノ御曹司、落ちる。

(f)伊義ノ渡……関田・懸棧・上田殿、落ちる。

(e)火ノ御子……打見ノ御料・寺本殿、討たれる。

(g)大豆戸ノ渡り……能登守秀康・平判官胤義、落ちる。

(h)食渡……安芸宗左衛門・下条殿・加藤判官、一矢も射ず  
落ちる。

(i)上瀬……重原・翔左衛門、奮戦ののち落ちる。

(j)洲俣……河内判官落ちる。

⑧六月八日の暁、貝矢久季ら尾張から掃洛、敗北を告げる。

⑨山田重忠、杭瀬川へ向かい、小玉党と激戦。

⑩山田重忠、渡辺翔とともに六月十四日掃洛、院の御所から  
の退去を命ぜられ嵯峨般若寺山へ落ちる。

### 三

①から⑩までの展開の中で山田重忠の名が見えるのは太字の  
数字で示した②・④・⑨・⑩の記事の中である。もっとも②の  
東海道の大將軍に任じられた河内判官藤原秀澄が美濃に到着後、  
尾張川を中心に各渡りや浅瀬に軍勢を分ける場面に出てくる山  
田重忠は、

洲俣ヲバ山田殿固メ給ヘ

と、秀澄の指示の言葉にその名が見えるだけである。

洲俣に配置された山田重忠が、本格的に描かれるのは、④の  
ところである。ところで洲俣は尾張川より西、つまり鎌倉から

東海道・東山道の二手に分かれた軍勢が合流集結する尾張川の瀬々を前衛とすれば、後衛に当たる地である。従つて京方の大將軍である河内判官藤原秀澄も山田重忠とともにこの洲俣を固めているのである。鎌倉を發つて東海道を西上する相模守北条時房・武藏守北条泰時の七万騎の軍勢が遠江国橋本に到着、同じく東山道の武田信光・小笠原長清率いる五万騎のうち先陣と思われる遠江井助が尾張の国府（稲沢市）にまで近づいていたのであつた。

このような情況の中で山田重忠が河内判官秀澄に向つて言つたことばが慈光寺本「承久記」に記されている（展開表の④）。

其時、洲俣ニオハシケル山田殿、此由開付テ、河内判官請ジテ宜給フ様、「相模守<sup>（注2）</sup>・山道遠江井助ガ尾張ノ国府ニ著ナルハ。我等山道・海道一万二千騎ヲ、十二ノ木戸ヘ散シタルコソ詮ナケレ。此勢一ニマロケテ、洲俣ヲ打渡テ、尾張国府ニ押寄テ、遠江井介討取、三河国高瀬・官道・本野原・音和原ヲ打過テ、橋下ノ宿ニ押寄テ、武藏井相模守ヲ討取テ、鎌倉ヘ押寄、義時討取テ、谷七郷ニ火ヲ懸テ空ノ霞ト焼上、北陸道ニ打廻リ、式部丞朝時討取、都ニ登テ院ノ御見参ニ入ラン。河内判官殿。」トソ申サレケル。

山田重忠のこの強硬な出撃論は、上巻の最後に置かれた北条義

時の軍勢手分けの場での作戦・指示のことばに对置されたものといえる。義時は各戦場での心得を「馬ノ腹帯ヲ強クシメテ、敵ハハヤルトモ我ハハヤラズシテ、シラマンニハ手ヲコシテ、手ノ際ノ戦シ給ヘ」「都ニ上リ、五条ヨリ下ニ火ヲ懸テ、謀反ノ衆ヲ賣出々々首ヲ切、十善ノ君ノ見参ニ入ヨ」などと指示したあと、万一敗れた時のことを

足柄・清見ガ関ヲ掘切テ、由比浜ヲ軍場ト誘テ手際ノ戦  
セシ。ソレニ戦負ヌルモノナラバ（中略）義時モ谷七郷ニ  
火ヲカケテ、天下ヲ霞ト焼上、陸奥ニ落下リ、数ノ染物巻  
八丈・夷ガ隠羽一度モ都ヘ上セズシテ、一期ガ間知ランニ、  
サテモ有ナン和殿原。

と言っているが、山田重忠を義時の双方に共通の語句（傍線部）が用いられているのもそうであるが、何よりも京方の人物で作戦を口にしてるのは山田重忠ただ一人なのである。ここに慈光寺本「承久記」が山田重忠に与えた役割の一つが見てとれる。<sup>（注3）</sup>

山田重忠の出撃論に対して、河内判官秀澄は鎌倉に向け進撃したならば、東山・北陸両道の軍勢が背後にまわり挟撃されてしまふと反対する。秀澄は「京ヨリ此マテ下タニ、馬足ノクルシキニ、唯是ニテ何時（ノ）日マテモ待請テ、坂東武者ノ種振ハ

ン、山田殿」と言うのである。この秀澄を慈光寺本は「判官ハ天性臆病武者ナリ」と評する。山田重忠は秀澄の反論を聞き「憎ヒ河内が詞哉」と思い、やむなく斥候を出して敵情を見させる。この斥候が敵の斥候二人を生捕りにして来る。ここでも山田重忠と秀澄とを慈光寺本は対蹠的に描くのである。

山田次郎ハ道理有ケル武者ナレバ、中六男ヲバ(其)日ノ大將軍河内判官ニゾ奉ラレケル。判官ハ心ノビタル武者ナレバ、御料食間ニ中六ヲバ早北シテケリ。

秀澄が慈光寺本のいうように東海道の大將軍であつたか否か、「吾妻鏡」等によつても確認できないのだが、慈光寺本は「道理有ケル武者」山田重忠を、「天性臆病」な「心ノビタル」「大將軍河内判官」秀澄の上に位置づける。ところが山田重忠と秀澄の対比は慈光寺本独自のものであつて、前田家本や流布本にはない。秀澄の名は流布本では洲俣へ向けられた人名として一回出るにすぎず、前田家本でも同じ箇所と処刑された記事に具体的記述をもたず名前が「秀隆」と誤つて載るだけである。このような秀澄の扱ひの差異がどのあたりに起因するかは不明だが、「吾妻鏡」承久三年十月十二日条「去月廿五日、今度合戦の張本能登守秀康・河内判官秀澄、南都に隠居するの由、其聞有るに依り、相州の計らひとして、家人等を遣はして、捜し求

むるの間、件の兩人は逃げ去り訖んぬ。(中略)今月二日、南都より秀康の後見を揃め出す。」同十六日条「去る六日寅魁、河内国に於て、秀康・秀澄等を虜ふ。是彼の後見の白状に依りてなり。同八日六波羅に到ると云々。天下乱逆の根源、此兩人の謀計より起る。重過の当る所、責めて余り有るか云々」(原漢文)などを見ると、兄秀康とともに秀澄もこの乱で重要な役割をはたしたようである。その秀澄に對置して、慈光寺本は山田重忠を描いているのである。従つて「洲俣ニオハシケル山田殿、此由聞付テ、河内判官誦ジテ直給フ様」といったように山田重忠に敬語を用いているのも自然なことである。森野宗明氏が、山田重忠を「彼の動作・存在に關する尊敬表現だけに限つても、二一例の使用例を数えることができる」ほど、慈光寺本では「各場面を通じてほぼ齊一に敬語の適用がみられる例外的人物である」(注4)とされたが、敬語の面から見ても山田重忠の扱ひは特別なのである。

#### 四

北条時房率いる鎌倉方の軍勢は遠江国橋本を發つて三河から尾張へ進み、一の宮で尾張川各瀬への軍勢手分けが行なわれた

(展開表⑤)。中でも河合に向つた武田と大井戸の小笠原の一族郎等の活躍はめざましく、これらの瀬を固めていた京方の「山道ノ人々ハ、皆悉落ニケリ」というありさまであった(表⑥)。これをかきわきりに、尾張川を守つていた京方の軍勢は次々と攻め落とされ、逃げ出す始末であつた(表⑦)。六月八日、貝久季・筑後太郎左衛門有仲らは都にもどり、尾張での敗北を後鳥羽院に報告する(表⑧)。以上のように慈光寺本の合戦記事は展開して行くのだが、山田重忠の洲俣における戦闘は描かれておらず、わずかに「火出ス計ノ戦シテ、多ノ敵ヲ討取」つた旨と、敵のことばの中に「洲俣ニテ手ノ際ノ戦シツル山田次郎」と記されるに過ぎない。

山田重忠が具体的に描かれるのは京方が総崩れになつて敗走する中に、一人踏みとどまつて最後の戦いを敢行する場面である(表⑨)。洲俣で合戦した山田重忠が気づいてみると「上ニモ下ニモ人モナシ」のありさまで、彼は「是ニテ討死セントハ思下モ、我身一人ニ成テ討死シテイカ、セン。杭瀬河コソ山道・海道ノタバネナレバ、其へ向ハン」と思い、三百余騎を連れて杭瀬川までやつて来て、小玉党三千騎と戦うことになるのである。山田重忠は勢を十の手に分け、波状攻撃をかけるのだが慈光寺本が描くのは三番手の「大加太郎カケ出テ戦ケリ。分

捕シテ山田殿へソ参ケル。」までで、その後山田重忠がどうなつたかは書かれず、六月十四日の夜半に渡辺翔とともに高陽院へ参上した記事(表⑩)になつてしまふ。ここに脱文がなく、本来このかたちであつたのなら、山田重忠の敗北・逃走を書かなかつたことになる。彼が洲俣を退却して杭瀬川に向つたところも「杭瀬河コソ山道・海道ノタバネナレバ、其へ向ハン」と、敗北としては描かれていないことも重なりあう。

山田重忠が一人残りとして奮戦したことは「吾妻鏡」六月六日条に「今晚、武藏太郎時氏(中略)安保刑部丞実光等、摩免戸(大豆戸)を渡るに、官軍矢を発つに及ばずして敗走す、山田次郎重忠独り残り留まりて、伊佐三郎行政と相戦ひ、是又逐電す」とあつて、慈光寺本とは別の合戦譚の存在を窺わせている。因みに前田家本・流布本はこの伊佐三郎行政との戦いを杭瀬川での出来事として描いている。

ともあれ慈光寺本は山田重忠を京方潰滅の中で孤軍奮闘する雄将として、尾張国の合戦のしめくりにもつて来ているのである。慈光寺本は続く宇治・瀬田の合戦記述を持たないのだから、事実上慈光寺本の合戦描写の最後に置かれたことになる。だが、孤軍の悲劇的武將は山田重忠一人ではなかつたはずである。「吾妻鏡」六月六日条には

鏡右衛門尉久綱、此所に留まり、姓名を旗面に註して高岸に立て置き、少輔判官代と合戦す。久綱云ふ、臆病なる秀康を相副ふるに依つて、所存の如く合戦を遂げず、後悔千萬と云々。遂に自殺す。旗銘を見て悲涙を拭ふと云々。

近江源氏佐々木流の鏡久綱が無念の死を遂げ、人々の涙を誘つた話が載っている。生死は問わず、山田重忠や鏡久綱のように最後まで戦つた京方武士も多くいたと思われるのだが、山田重忠だけが慈光寺本に記されるのは、森野氏の言われるように尾張の武士であることによるのであろうか。

さて慈光寺本の山田重忠の最後の記事は、彼が渡辺翔と三浦胤義らと連れ立って院の御所高陽院に参上、御所で討死しようとして、追い払われる場面である(表⑩)。この時、胤義が「口惜マシマシケル君ノ御心哉。カ、リケル君ニカタラハレマイラセテ、謀反ヲ起シケル胤義コソ哀ナレ」と言つたという部分、前田家本・流布本では山田重忠のことばになっている。御所をあとにした山田重忠の前に紀内殿の勢が現われる。

山田殿カケ出申サレケルハ、「我ヲバ誰トカ御覽ズル。尾張国住人山田小二郎重貞<sup>(注5)</sup>」トナノリテ、手ノ際戦ケル。

敵十五騎討取、我身ノ勢モ多討レニケレバ、嗟峨般若寺山へゾ落ニケル。

これが慈光寺本の山田重忠に関する最後の記述で、その姿を消して行く。のちに成立した前田家本・流布本が山田重忠をして後鳥羽院を「日本一の不覚人」とののしらせた、後鳥羽院批判者の役は慈光寺本では荷わせられていない。

慈光寺本に描かれた山田重忠像をまとめてみると次のようになるかと思う。その一は、合戦が始まる以前の作戦段階と戦闘終了(京方敗走)の時点で現われることにより、合戦叙述の核になっており、また鎌倉方軍勢の中心である武田・小笠原と対等の比重を持った京方武士の要として描かれていること。二として、河内判官秀澄と対蹠的描写がなされており、これによって武人としての優秀性のみならず戦略的にもすぐれた武将になっている。さらに言うなら京方勝利の可能性を持ちながらつぶされた人物として描く意向が窺われる<sup>(注6)</sup>。それでありながら、のちの諸本で付加される後鳥羽院批判者の役割はまだ持っていない。

## 五

山田重忠を中心に慈光寺本の合戦叙述を検討してみると、一箇所きわめてすわり具合の悪い記述にでくわす。それは前掲の

展開表の⑧の部分である。そこでまず⑧の前後の叙述の類型を見ておくことにする。表の②の部分、つまり東海道の大將軍河内判官秀澄が美濃に到着し、京方の軍勢を尾張川・洲俣川の瀬々へ手分けする場面であるが、表に示したとおり(A)の阿井(河合)渡から(J)の洲俣までの十の渡とそこへ派遣された人々の名前が列記される。(J)の洲俣には「山田殿」の名しか出てこないが、④で明らかにされるようにここには大將軍河内判官秀澄がいるのである。この秀澄の口から発せられた地名とそこを守る人名が、ほぼ同じ順序で京方敗退の場面に出てくるのである。表の⑥と⑦がそれにあたる。順序に乱れがあるのは、これも表に示したように(b)と(a)、(f)と(e)の二ヶ所である。鎌倉の大軍が尾張川各瀬々の京方の防備を怒濤のように蹴破って行く様を描く叙述は、秀澄による軍勢手分の叙述と呼応しているのである。例えば、軍勢手分の(G)、

大豆戸ヲバ能登守・平判官固メケリ。

は、京方敗退の(8)に

大豆戸ノ渡り固メタル能登守秀康・平判官胤義カケ出テ戦フタリ。平判官申ケルハ、「我ヲバ誰トカ御覧スル。駿河守カ舍弟胤義平判官トハ我ゾカシ」トテ、向フ敵廿三騎ゾ射流シケル。待請々々多ノ敵討取テ、終ニハシラミテ落ニ

ケリ。

とあるように、記事の長短はあるが、「どこどこヲ固メタル誰々、終ニハシラミテ落ニケリ(討レニケリ)」と敗北の事実を重ねることによって浪滅的打撃を確認させる叙述の方法である。

ところが軍勢手分けの最後に出てくる(J)洲俣は、

洲俣ヲバ山田殿固メ給へ。

とあるのに、京方敗退の(J)では、

洲俣固メタル河内判官ハ、夜ベノ戌時ニ落ニケリ。

となつてゐる。前述したように洲俣には河内判官もいたのであるから、これでよいのだが、しかし山田重忠はどこに行つてしまったのか。慈光寺本の軍勢手分の記述と京方敗退の記述との呼応関係というパターンがここでは崩れているのである。そして、これに続く記述が前掲の表⑧の「六月八日の晩、貝矢久季ら尾張から帰洛、敗北を告げる」記事なのであるが、実はこの⑧の記事をそっくり除いてしまふと慈光寺本のパターンが崩れることなく、すんなりと続いて行くのである。すなわち表の⑦は⑨と接続させて読むべきものだと思えるのである。その⑨の書き出しは、

去下モ山田殿ハ、火出ス計ノ戦シテ、多ノ敵ヲ討取ト見給



へバ、上ニモ下ニモ人モナシ。

というもので、この「去ドモ」という迎接の接続詞は、本文のままに読めば（つまり⑧との関連で読むと）その直前の

宇治・勢多両所ノ橋ヲ取破テ、軍場ト定メラル。公卿・殿上人モ、其道ニ叶ヒヌベキヲバ皆差向サセ給フ。

を受けて、山田重忠が「火出ス計ノ戦シテ、多ノ敵ヲ討取」ったのは、宇治・瀬田での合戦になってしまう。これは明らかに不自然である。何故なら「多ノ敵ヲ討取」った山田重忠があたりを見回したところ「上ニモ下ニモ人モナ」かったので、「重定ハ是ニテ討死セントハ思ドモ、我身一人ニ成テ討死シテイカッセン。杭瀬河コソ山道・海道ノタバネナレバ、其ヘ向ハシ」と、三百騎を引き連れて「杭瀬河ニ打立」ったと書かれているからである。ここを先に述べたように⑧の記事を取払って⑦の最後とつなげて読めば、

洲侯固メタル河内判官ハ、夜ベノ戌時ニ落ニケリ。去ドモ山田殿ハ、火出ス計ノ戦シテ…………

となり、『秀澄は前夜の戌の刻に早々と逃げ出したが、山田重忠は激しい合戦をして』の意味になって、ここでもまた秀澄と山田重忠が対蹠的に描かれていることになるだけでなく、京方敗退を「落ニケリ」「討レニケリ」と重層的にたたみかけて演

滅的敗北を強く印象づけたその最後に「去ドモ山田殿ハ」と一人踏みとどまる山田重忠の姿が強調されることになる。

## 六

そこで次に、問題の⑧の記事内容を具体的に見てみよう。その量は約一丁十五行ほどである。その全文を引用しておく。

承久三年六月八日ノ晚、員矢四郎左衛門久季・筑後太郎左衛門有仲、各身ニ疵蒙ナガラ院ニ参テ申ケルハ、「坂東武者数ヲシラズ實上ル間、六日洲侯河原ニシテ、纒ニ戦フトイヘドモ、皆落ヌル」由ヲ奏シ申ソ憑モシケナキ。院イト、騒セ給ヒテ、院ニ宮々モ引具シ奉テ、二位法印尊長ノ押小路河原ノ泉ニ入セ給フ。公卿・殿上人若キ老タル皆物具シテ御供ニ候。ケニゲニ矢一射ン事知ガタシ。去程ニ西時計東坂本へ御幸ナル。御勢纒ニシテ、千騎トダニ見ヘヌソ口惜キ。カ、ルニ付テハ、唯都ノ騒ナリ。何ナル御計ニカアレバ、又都へ帰り入セマシマセバ、人ノ気色何トナク、ヨシト云ントスレバ、宇治・勢多両所ノ橋ヲ取破テ、軍場ト定メラル。公卿・殿上人モ、其道ニ叶ヒヌベキヲバ皆差向サセ給フ。

六月六日の洲俣川の敗戦が、八日の朝、都の後鳥羽院のもとにもたらされ、驚いた院は皇子を連れて尊長の邸に入り、のち坂本へ移ったが、思い返して都にもどり宇治・瀬田に軍勢をさし向けたという記事であり、これと内容的にはほぼ近いものに「吾妻鏡」の六月八日の条がある。しかしそれよりもさらに近似しているのが「六代勝事記」である。

同じき六月八日の晩、糟屋左衛門の尉久季、筑後の左衛門の尉有永、各疵をかうぶりて、洲俣より掃り参りて、雲霞のいくさ、山野にみちて、官軍おびえおそれ、戦ふにたへずして、六日敗れ侍るよし奏すれば、騒ぎののしりて、院々宮々を引具しまるらせて、尊長法印の押小路河原の家にて、公卿殿上人、鎧を着旗を掲げて、人なみなみに武士の姿をかれども、いかでか征戦の道を知らむ。なかなかいたはしくぞ見えし。やがて東坂本へ御幸ならせ給ふに、御供なる武士、わづかに千人ばかりなり。都の人は上下心をまよはせて、あるにもあらぬに、山王仏法を守る御はかりにや、十日は都へ掃り住ませ給ひぬ。十三日より戦ひて、十四日に真木鳴を渡すに、逃ぐるに道をうしなひて、死ぬる者多し。

(傍線筆者)

慈光寺本と「六代勝事記との関係は「ある」とする説と「な

い」とする説があるが、参看しているようだ」と杉山次子氏<sup>(注7)</sup>が言われたとおり、傍線を付した共通語句を見れば、両者の関係は直接的なものであると判断してよろしかろう。しかし、関係がない」とする説<sup>(注8)</sup>があるのは、両書に共通の記述・語句が見出せるのが、この部分(前掲表の⑧)だけに限られているからだと思われる。慈光寺本のこの部分にだけ「六代勝事記」との共通性が見られること、詳述してきたように慈光寺本のこの記事がそれまでの合戦叙述・山田重忠像造形のパターンを分断していること、この二点を考え合わせると単に慈光寺本の作者が「六代勝事記」を採用したものは考えがたい。かつて私は慈光寺本の日付けの配列を検討して、後人の加筆があったのではないかと論じた<sup>(注9)</sup>ことがある。その時に現在の慈光寺本に後の人の筆が加わっているか否かについての諸説をやや詳しく紹介したので再述は避けるが、この部分もやはり後人の加筆になるもので、その折、用いられたのが「六代勝事記」であったと思うのである。従って、原慈光寺本には「六代勝事記」の影響はなかったろうと考えている。

以上述べて来たように、この部分が後人の「六代勝事記」による加筆であるならば、何故そのような加筆が必要であったかが次の問題になる。これについては、この記事が挿入された箇所がどこであり、どのような内容の記事であるかという点から推論するよりよいようである。そこでまず、尾張・洲侯の敗退以後の事件の展開を「吾妻鏡」等によって年表にしてみると、

六月六日 京方敗走。

七日 鎌倉方、宇治・瀬田の軍勢手分け。

八日 尾張の敗北を院に報告。院の狼狽。坂本へ御幸。

九日 坂本滞在。

十日 院、都へ還御。

十二日 京方軍勢の手分け。山田重忠瀬田へ向う。

十三日 宇治合戦。

十四日 宇治・瀬田合戦。京方敗退。武士達掃落、多く誅せらる。

ということになる。慈光寺本の問題の記事（後人加筆部分）は、

内容的に六月八日から十二日までの出来事を含んでいる訳である。またこの記事の直前は再三述べたように六月六日の洲侯における河内判官秀澄の敗走（展開表⑦）であり、問題の挿入記事（⑧）のあとに本来は⑦に入るべき山田重忠の小玉党との合戦記事（⑨）へと続き、山田重忠らが戦いに敗れ掃京する（洲侯・杭瀬からの掃京であるが）記事（⑩）になるのである。

よく知られているように慈光寺本には宇治・瀬田の合戦の具体的描写は存在しない。瀬田を守った山田重忠は、ここでも敗れ再度都へもどつて来たのである。慈光寺本の加筆者は宇治・瀬田で合戦があったことも、山田重忠が敗退したことも知っていたに違いない。しかし慈光寺本にはそのことが書かれてなかった（あるいはその部分が散佚していた）ため、「六代勝事記」によつて事件の展開を補おうとしたのではなからうか。しかし、もともと書かれてあった「杭瀬河」の語を訂正しなかつたので、挿入記事がすわりの悪いものになつてしまつたと思われるのである。

注1 日本古典文学大系「沙石集」解説。

注2 北条時房のことだが、時房はこの時点では遠江橋本にいる。この記事のあと「去程ニ、海道ノ先陣相模守ハ、橋下の宿ヲ立

テ」とあり不審。

注3 前田家本にも山田重忠が自らの意見を具申する描写はあるが、迎撃を主張するなど内容的にはかなりの違いがある。

注4 「慈光寺本承久記」の武家に対する言語待遇に就いて「

(川瀬博士古稀記念国語国文学論文集) 昭54・雄松堂書店)

注5 注4に同じ。なお山田重忠については鶴岡都氏「承久の変

に於ける尾張武士の行動——山田次郎重忠——」(郷土文化

一一四号 昭54)がある。

注6 この傾向は前田家本にひき継がれて行くと思われるが、本

稿では諸本による人物像の相違は融れる余裕がなかった。

注7 「慈光寺本承久記成立私考(一)——四部合戦状本として——

(軍記と語り物) 七号 昭45)

注8 富倉徳次郎氏「慈光寺本承久記の意味——承久記の成立——

(国語国文) 昭18)

注9 拙稿「慈光寺本「承久記」の土御門院配流記事をめぐる

——日付の検討から——」(青須我波良) 28号 昭59)